

## 神奈川県知事賞

### 「始まりは勘違い」

秦野市立南中学校  
3年 北村 璃胡

「鍋の火止めてー」

二階からの母の声で仕方なく重い腰を上げキッチンに向かった。キッチンに近づくと、お米を炊いている匂いがした。鍋のフタが少しずらしてあり中が見えた。私の予想は大当たりでお米を炊いていた。さつきまでのキッチンに向かい始めた時の面倒臭いなど思った気持ちは、もうない。鍋で炊いたご飯が食べれると思うと自然とやけている私があった。夕飯のおかずは何か？ご飯が進むおかずがいいなあなんて一人想像しさらにやけていた。

「お粥どう？炊けてる？」

と母の声。私にやけた顔はここで終わった。母が鍋で炊いていたのは、八ヶ月の弟の離乳食。お粥だった。舞い上がった気持ちが一気に怒りへと変わる。母に強い口調で言う。

「私たちのご飯も鍋で炊いてよ。」

母は笑いながら答えた。

「夏休みなんだし、作文の宿題にも書けるから自分でやってみたら。」

どうしても鍋で炊いたご飯が食べたい気持ちは変わらず挑戦してみることにした。お米を研いだことはあるのでこは余裕。

「シヤカシヤカシヤカ、ザザー。」

心地良いリズムで研ぐ。次はしつかり浸水させる。この浸水させる三十分がとても長く感じ時計ばかり見ている。三十分経ちさつきまで透明感のあるお米だったのが、今は白濁したお米へと変わっていた。この変化も初めて知ることができた。ざる上げし水を切りいよいよ鍋へと移す。水を加えいよいよ火にかけ、しばらくすると、ぶくぶく音がしフタから泡が出てきた。沸騰してもそのまま二分炊き、その後火を少し弱めて三分、続けて弱火に落として五く七分炊く。ネットで調べた通り順調に進んでいる。少しフタを開け水分の確認。もう水はなく炊き上がっていた。最終の蒸らしの十分。またこの十分が、私には一時間にも二時間にも感じる長い時間だった。そしてついに完成。しゃもじで軽く混ぜ、我慢できずに一口味見。「おいしい。」

思わず大きな声を出していた。隣に立ちおかずを作っていた母と目が合い二人で笑顔になる。

「いよいよ夕飯。みんなが座るとすぐに」

「今日のご飯は、お姉ちゃんが一人で鍋で炊いてくれたんだよ。すごいよね。」

と誉めてくれた。祖母からは

「はじめチョロチョロ中。パッパ赤子泣いてもふた取るな。で作ったの？」

と意味のわからない呪文のようなことを言われた。後で意味を調べたら、炊飯器が普及する前のかまど炊きご飯の火加減をまとめた言葉だと知ることができました。夕飯を食べ始める。

「やつぱり鍋で炊くと一味違うね。おいしいよ。ありがとう。」

と喜んでくれた。私の隣では、私が勘違いしたお粥を弟がパクパクおいしそうに食べている。口に運ぶのが遅くなると声を出し催促までしてみんなを笑わせている。今日の夕飯は、お米の話を中心にいつも以上に会話が弾んだ。会話と共にみんなの食も進み鍋のご飯も空になり、私は一人ガッツポーズを決めた。

勘違いから始まった鍋で炊くご飯作り。受験生の私には、良い気分転換となった。この機会をつくってくれた離乳食期の弟と、私たちの主食のお米がまた好きになった。弟とお米に、「ありがとう。」